様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３８８０

研究課題名（和文）中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに対する地域特性を勘案した支援方法

研究課題名（英文）Support method considering regional characteristics for medical and welfare needs of care-requiring elderly residents in hilly and mountainous areas

研究代表者
鈴木　裕介（Suzuki, Yusuke）

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：２０６１２００５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、実証的に中山間地域の地域特性を勘案した支援のあり方を検討することである。この目標達成のため、量的調査を行い、中山間地域におけるソーシャルサポートネットワークおよび関連する項目を測定して、地域の差異について検証した。調査地区は、高知県にある中山間地の5市町村である。調査対象者は、75歳以上の高齢者全員である。
　調査の結果、中山間地域でも地区によって市民参加、社会的凝集性、互酬性の得点傾向が異なることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、これまで明らかにされてこなかった中山間地域内の差異に焦点を当てて、量的調査により、中山間地域で暮らす高齢者のソーシャルサポートネットワークおよび関連する項目を測定したことである。これらの分析結果は、今後、中山間地域における支援方法を検討するにあたって、データや根拠に基づく基礎資料となる点で、学術的および社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：The objective of the present study is to consider support that based on regional characteristics of hilly and mountainous. To achieve this goal, we conducted a quantitative survey, measured social support networks and related items in hilly and mountainous areas, and verify regional differences. The survey areas are five municipalities in the hilly and mountainous areas of Kochi Prefecture. The subjects of the survey are all elderly people aged 75 and over. The results of the survey revealed that the tendency of scores for civic participation, social cohesion, and reciprocity differed among districts within the hilly and mountainous areas.

研究分野：社会福祉学

キーワード：地域福祉　中山間地域　高齢者　医療福祉　ニーズ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

地域包括ケアシステムは、「自助、互助、共助、公助」を組み合わせて構築する必要がある（2013 地域包括ケア研究会報告書）。これら４つの「助」について考えるにあたり、正確に地域の実情を把握する必要があり、把握することによって地域の特性を勘案した地域包括ケアシステムの構築につながると考えられる。では、どのような地域の実情に関するデータを収集する必要があるのだろうか。

その手掛かりの一つとしてソーシャルサポートネットワークが挙げられる。これまでの研究においてソーシャルサポートネットワークは、主観的健康感と関連していることが指摘されている（井藤ら 2012）。また、主観的健康感が低いと、実際の死亡相対リスクが高いことが明らかになっている（Mackenbach,et al2002）。つまり、ソーシャルサポートネットワークは、寿命に関連している可能性が考えられる。

とりわけ中山間地域においては、他の地域以上にソーシャルサポートネットワークは、重要な概念であると考えられる。中山間地域は、その他の地域と比較して、地理的条件や人口動態など様々な点で異なっている。さらに、中山間地域では、公的な社会資源が不足しがちであり、また、マンパワーや財源も乏しい。加えて、中山間地域とひとまとめにすることが難しいくらい地域によって状況が異なる。この状況を踏まえるならば、公的サービスの充足を目指しつつも、限られた資源の効率的な運用と、地域住民の力を活かした地域包括ケアシステムのあり方について地域ごとに考えることが重要であると考えられる。

そのためは、中山間地域をいくつかのブロックごとに分けてソーシャルサポートネットワークおよび関連する要因を測定し、どのように地域包括ケアシステムに反映することが望ましいのか検討することが必要だろう。

２．研究の目的

上述した動向を踏まえて、中山間地域におけるソーシャルサポートネットワークおよび関連する項目を測定し、実証的に地域特性を勘案した支援のあり方を検討する。

３．研究の方法

（１）調査方法および調査対象者

調査地区は、中山間地域が数多く存在する高知県にて、調査協力を得ることができた 5 市町村である。調査対象者は 5 市町村の 75 歳以上の高齢者全員である 5056 名とした。個人情報の取り扱いについては、各市町村で住民基本台帳の一部の写しの閲覧申請を行い、閲覧の同意を得た。

調査方法は、自記式調査質問紙を用いた無記名の郵送調査である。調査期間は、2020 年 11 月から 2020 年 12 月までである。5056 名のうち 1568 名から回答を得た（回収率 31.0%）。

（２）調査項目および分析方法

ソーシャルサポートネットワークおよび関連する要因を測定する項目は、斎藤ら（2017）が開発した「地域単位の健康関連ソーシャルキャピタル指標 Ver4.0」を用いた。この尺度は、市民参加（5 項目）、社会的凝集性（3 項目）、互酬性（3 項目）の 3 因子で構成されており、各因子を少ない項目で測定することができる。ソーシャルサポートネットワークは、互酬性に該当すると考えた。

また、生活満足度の指標は、「生活満足度尺度 K（LSIK）」（小谷野 1990）から選定した 4 項目を加算したトータルスコアを用いた（岡戸ら 2003）。

「地域単位の健康関連ソーシャルキャピタル指標 Ver4.0」の問 3 の 5 項目、問 4 の 3 項目、問 5 の 3 項目について単純加算して、市民参加得点、社会的凝集性、互酬性得点として算出した。分析には、SPSS25.0 for Windows を用いた。

具体的調査項目は下記のとおりである。

・「地域単位の健康関連ソーシャルキャピタル指標 Ver4.0」
参加している会やグループについておうかがいします。
1）あなたは下記のような会・グループにどのくらいの頻度で参加していますか

（1）ボランティアのグループ
（2）スポーツ関係のグループやクラブ
（3）趣味関係のグループ
（4）学習・教養サークル
（5）特技や経験を他者に伝える活動

あなたの住んでいる地域についておうかがいます。
1）あなたの地域の人々は、一般的に信用できると思いますか。
2）あなたの地域の人々は、多くの場合、他の人の役に立とうとすると思いますか。

3）あなたは現在住んでいる地域にどの程度愛着がありますか。

あなたとまわりの人の「たすけあい」についておうかがいます。
1）あなたの心配事や愚痴（ぐち）を聞いてくれる人。
2）反対に、あなたが心配事や愚痴（ぐち）を聞いてくれる人。
3）あなたが病気で数日間寝込んだときに看病や世話をしてくれる人。

・「生活満足度尺度 K（LSIK）」
1）去年と比べて同様に元気だと思いますか。
2）全体としてあなたの今の生活は幸せであると思いますか。
3）最近小さなことを気にするようになったと思いますか。
4）あなたの人生をふりかってみて満足できますか。

（３）倫理的配慮
「高知県立大学社会福祉研究倫理審査委員会」（社研倫 17-73 号）および「明星大学研究倫理委員会」（H30-053）の審査・承認を受けて実施した。郵送調査の際、調査票にて本調査の趣旨、個人が特定されないように個人情報保護に努めることを説明し調査票は無記名とした。なお、返送された調査票の管理に関しては研究室内から外部に持ち出さず厳重に管理した。

４．研究成果
（１）調査対象者の基本属性
「性別」は，男性 553 人（36.5%），女性は 964 人（61.5%）であった．年齢は，75～79 歳代 288 人（18.9%），80～84 歳 487 人（31.9%），85～89 歳 434 人（28.4%），90～94 歳 233 人（15.3%）95 歳以上 85 人（5.6%）であった。
ADL は，齋藤ら（2001）の ADL，IADL 統合尺度を構成する ADL 項目群を設定した．具体的には，「食事」，「整容」，「トイレ」，「入浴」，「着替え」の 5 項目について尋ね，各項目について「できる」を 2 点，「できない」に 1 点として，単純加算し，10 点満点を自立する得点を作成した．ADL の Cronbach のα信頼係数は，0.91 であり，信頼性が確認された．5 点が 116 人（7.9%），6 点が 44 人（3.0%），7 点が 41 人（2.8%）8 点が 70 人（4.8%）9 点が 108 人（7.4%），10 点が 1082 人（74.1%），平均値は 9.22 点であった．

（２）ソーシャルキャピタルの基礎統計量
全体の市民参加得点の平均値は、6.72±3.15（平均値±SD、以下同様）であった。社会的凝集性得点の平均値は 11.34±2.06 であった。互酬性得点の平均値は、6.38±3.35 であった。
A 地区の市民参加得点の平均値は、7.11±3.38 であった。社会的凝集性得点の平均値は 11.64±2.08 であった。互酬性得点の平均値は、6.86±3.46 であった。
B 地区の市民参加得点の平均値は、6.18±2.31 であった。社会的凝集性得点の平均値は 11.42±1.94 であった。互酬性得点の平均値は、6.43±3.41 であった。
C 地区の市民参加得点の平均値は、6.54±2.87 であった。社会的凝集性得点の平均値は 11.06±2.02 であった。互酬性得点の平均値は、6.27±3.55 であった。
D 地区の市民参加得点の平均値は、6.67±3.03 であった。社会的凝集性得点の平均値は 11.46±2.20 であった。互酬性得点の平均値は、6.17±3.08 であった。
E 地区の市民参加得点の平均値は、7.22±4.07 であった。社会的凝集性得点の平均値は 10.71±1.86 であった。互酬性得点の平均値は、6.05±3.40 であった。

（３）LSIK の基礎統計量
全体の得点の平均値は、13.7±3.06 であった。A 地区の得点の平均値は、13.68±2.95 であった。B 地区の得点の平均値は、13.90±3.01 であった。C 地区の得点の平均値は、13.70±2.91 であった。D 地区の得点の平均値は、13.79±3.17 であった。E 地区の得点の平均値は、13.47±3.17 であった。

（４）考察
市民参加の平均値は、最も高い得点を示した E 地区と、最も低い得点を示した B 地区では、1.03 ポイントの開きがある。市民参加得点の差は、「あったかふれセンター」が影響していると推察される。高知県の「あったかふれあいセンター」事業とは、地域福祉の拠点となる存在であり、小規模多機能支援拠点としての機能を有し、そこでは高齢者、子ども、障害者など多様な人が利用している（吉本 2020）。高齢者向けには、「元気な高齢者や介護認定者の居場所」、「生活に不安のある方や、閉じこもりがちな方の居場所」としての場所を提供する機能があり、そのなかで趣味や教養などの社会参加をしていると考えられる。このことから、あったかふれあいセンターが活発に活動しているか否かで、市民参加得点の多寡に影響を与えていると考えられる。
凝集性の平均値は、どの地域も高い傾向がみられた。高知県産業振興推進部中山間地域対策課が行った調査である「平成 23 年度高知県集落調査」（2012）では、93.0%の住民が集落への愛着を感じている、と回答している。凝集性を構成項目には地域に対する愛着を問う項目があり、「平

成 23 年度高知県集落調査」の結果を裏付けるものであることが確認された。しかし、地区ごとの凝集性に着目すると地域によって差異がある。「平成 23 年度高知県集落調査」では、集落の自慢を調査しており、「自然や景観」が最も多い回答となっていることから、中山間地域の凝集性は自然や景観をどのように捉えているかに影響を受けている可能性があると推察される。

互酬性の平均値は、A 地区が高い傾向を示した。中山間地域は、人間関係がよいことが示唆されている（太湯 2006）。その一方で、この緊密な人間関係は，支援専門職と，支援を受ける利用者の関係性の前に，同地域で暮らす地域住民同士という 2 つのコンテクストが混在することになり，一般的に語られる支援者と援助者間の関係とは様相が異なり、近所の人に家庭の状況を知られたくないという心理的抵抗がある場合、福祉アクセシビリティが低下することが指摘されている（鈴木 2015）。

市民参加得点、社会的凝集性得点、互酬性得点がすべて高得点の傾向があるのは A 地区であった。なぜすべての領域で高得点の傾向となったのかという点について「あったかふれあいセンター」、「自然や景観」のみで説明することは限界があり、その他の要因が関連していると推察する。しかし、その要因まで本調査で特定することは難しく、研究の限界の一つである。

本研究の結果、同県内の中山間地域でも地区によって市民参加、社会的凝集性、互酬性の得点傾向が異なることが明らかになった。市民参加は「あったかふれあいセンター」の活動、凝集性は「自然や景観」、が影響していると推察した。

（5）今後の展望

本研究で得られたデータを詳細に分析することは今後の課題である。そのうえで、なぜ同じ県内にもかかわらず異なる特徴があるのかについて本研究の推察を含めた質的調査を行い、異なる特徴の理由および要因について明らかにしたい。

文献

地域包括ケア研究会（2013）「地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点」『持続可能な介護保険制度及び地域包括ケアシステムのあり方に関する調査研究事業報告書』三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング.

太湯好子・岡田ゆみ・神宝貴子・ほか（2006）「中山間地域における高齢者の健康寿命を支える地域保健福祉の基盤づくりに関する研究」『川崎医療福祉学会誌』115(2)， 423-431.

井藤佳恵・稲垣宏樹・岡村毅（2012）「大都市在住高齢者の精神的健康度の分布と関連要因の検討．要介護要支援認定群と非認定群との比較」『日本老年医学会雑誌』49(1)，82-89.

高知県産業振興推進部中山間地域対策課（2012）『平成 23 年度高知県集落調査』.

Mackenbach,J.P., Simon,J.G., …, & Joung,I,M.(2002)Self-assessed health and mortality: could psychosocial factors explain the association? International Journal of Epidemiology, 31（6）,1162-1168.

古谷野亘（1990）「生活満足度尺度の構造―因子分析の不変性」『老年社会科学』12，102-116.

岡戸順一・艾斌・巴山玉蓮・ほか（2003）「主観的健康感を中心とした在宅高齢者における健康関連指標に関する共分散構造分析」『総合都市研究』81，19-30.

鈴木裕介（2015）「中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究―地域を基盤として支援を行っている福祉専門職に対するインタビュー調査に基づいて」『社会福祉学』56(3)， 58-73.

吉本知子（2020）「高知県『あったかふれあいセンター事業』にみる地域共生社会づくりへの展望」（https://www.tyojyu.or.jp/net/topics/tokushu/kyoseigatasabisu/kochi-center-project.html，2021.4.1）.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木裕介	４．巻 93（6）
２．論文標題 中山間地域における高齢者の介護の現状	５．発行年 2018年
３．雑誌名 農業および園芸	６．最初と最後の頁 497-501
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関